

せまいせかいでぐるぐるまわる



音引 陸

僕の8時間はあなた

今日も、僕は僕の世界で右往左往している。

出社すると、既に書類やメモがデスクに置いてあって僕のやる気を削ぐ。いつも一番にくる彼女は、まだ来ていない。毎朝、彼女と2人だけになるのは朝のこの時間しかないというのに。あまり口数の多くない彼女とゆっくりと話せる、唯一の時間がないという事が、更にやる気を削いだ。

「珍しく先を越されたみたい」

僕の出社から10分後、不機嫌な低い声がまだ誰もいないフロアに響いた。

「10分遅刻だね。珍しい」

新しい靴が、足に合わなかったの。痛くて。そう言うと軽く足を跳ね上げて僕に見せた。ブラウンの、踵にリボンのついた靴。

「相変わらず、君は早いね」

彼女は僕の事を『君』という。5歳年上、僕の先輩。独身。でも、もうすぐ結婚してしまう。同じ会社の、別部署の先輩と。そう考えて、心臓が音をたてて痛んだ気がした。

社会人になった時、僕の世界は果てしなく広がってゆくのだと思っていた。進学する度に同じように思っていたが、所詮は学生で、大して世界なんか広がらない。僕が居るところ。それが全て。社会に出たら、少しは違うはずと期待していたが、やっぱり変わらない。会社とその付き合いだけが、今の僕の世界。一日8時間以上をここで生きているのだから、僕の喜怒哀楽の源は全てがここ。恋も。

新入社員研修を終えて配属された企画部の先輩が彼女だった。口数も少なくあまり笑わず、お酒の場で酔いもせず饒舌にもならず、勿論絡んだりもしない。ただ、人の話を微笑んで聞いているだけ。そんな彼女を好きになってしまった。好きになってしまってから3年、何も変わらず僕は彼女を好きなままだ。

「結婚する事になりました」

他人事のように彼女が言ったのは、先月だ。

「結婚する事になりました。急ですみませんが、お相手の都合で来月一杯までの勤務になります。あの、海外に行くので。ええと、海外事業部の佐山さんです。結婚式とか・・・やらないんです。ちょっとバタバタで。すみません。ご迷惑かけますが、引き継ぎ、宜しくお願いします」

周りが湧く中、年甲斐もなく泣きそうだった。青天の霹靂って、こういうときに使う言葉何だと思った。

「私の仕事は、君が頑張るのよ」

出来るわけがない。あなたがないのに。そう言いたかった。僕は、思っていたより女々しい

。「昨日、久しぶりに古い本を読んだのよ」

デスクに着いた彼女がふいにそんな事を言い出した。

「何の本です？」

「サロメ」

本を読まないという僕に、彼女は色々な本を薦めてくれた。サロメもその中の一冊だ。おかげで、この3年僕は本の虫だった。サドも読んだしカミュもフランクフルも読んだ。少しでも彼女がいいと思うものにふれようと必死だった。そうすれば、何か進展があるかもしれない。より近づくかもしれない。僕は僕らしくなくてもよかった。彼女の好きなもののなかに、僕も入れて欲しかった。

「サロメ、面白かったです」気のきかない感想が口からこぼれた。何を言ってるんだ僕は。

「ああいう風に、というと極端だけれど、私もサロメのようになりたかった」

「好きな男にキスをするために、その男の首を落とさせるんですか？」

「できることならね」

彼女は軽やかに笑うと、僕に本を差し出した。サロメだ。

「持ってますよ。僕も買いましたから」

「私には多分もう必要ないもの。きともう読まない。だから貰って。これをもっていたら衝動が抑えられなくなりそうな気がして、大好きだけど嫌なのよ」

差し出された本を受け取る時、指先が少しだけ触れて、そのまま2人とも硬直した。

「今日で最終日ですから言いますけど、好きです」

彼女は少し笑って、でもいつもどおり低い声のトーンのまま、ありがとう。私もよ。と言った

。「もう後戻りが難しくなっちゃってから気付いたの、馬鹿よね。それに、私はサロメにはなれないもの」

ドアに近づいてくる声が聞こえる。僕らは指を離して『いつもどおり』仕事をする。何もなかったかのように、何も言わなかったし、きかなかったし。ただ、手元に本が1冊増えただけ。

恋が終わったんだと、思った。

暮らしに不自由はさせないから、結婚して欲しい。そう言われて何も躊躇わずに結婚した。あのとき27歳だった私も30歳になった。あなたは40歳。今日は魔の3年目。結婚記念日。

プロポーズどおり、私は何も不自由していない。結婚と同時に仕事も辞めた。上司だった人が夫になったのだから、そのまま勤めるという選択肢はなくて、転職をしようと思っていたのに夫に止められてしまった。不自由はさせないと言ったでしょう？君は家に居て僕の帰りを毎日待っていて欲しい。そう言われて。だから今、私はずっと家に居る。

朝は夫より早く起きてお弁当と朝ご飯を作り、夫を送り出したあとは洗濯。3LDKのあまり大きくない住まいの掃除をして、お買い物へ。食品や日用雑貨を買う程度で直ぐに帰ってくる。午後は殆ど自由時間だ。好きな音楽を聴きながら本を読む。少し手の込んだお菓子を作る。早くからキッチンに籠って豪華な夕飯を作る。それ以外に特にする事はない。

私の世界は、この3LDKの空間だけ。

毎日暇だとは思わない。本を読んでいれば時間なんてあっという間だから。本の気分じゃなかったらキッチンへ行けば良い。人と話さなくても困りはしないし、話したい事もない。あなたは優しい。仕事は忙しそうだけれど、予定はしっかり伝えてくれて、帰るコールも欠かさない。疲れでつっけんどんになる事もない。突然のプレゼントやディナーの誘い。そういえば、あなたが怒っているところを見た事がない。今気付いた。

このまま、こんな微温湯に浸かっていて、いいの？

私は、自問自答を繰り返す。いいの？いいに決まってる。本当にいいの？あの人の望む事だからいいの。ぐるぐる考えていたら、今日の夕飯を失敗してしまった。あなたは私の好きなローラン・ペリエとトッパスのチョコレートケーキを買って帰ってきてくれる筈なのに。夕飯が美味しくないなんてとんでもない事だ。ああ、でも、もうなんだか作り直す気分にもなれない。

本当に、いいの？

何故か泣き出してしまった。あなたが帰ってくるのに。もうすぐ帰ってくるというのに。キッチンをそのままに、衝動的に夫に電話をかける。多分もう、駅から家に向かって歩いているところ。

『もしもし？どうした？』

「ごめんなさい」

『どうしたの？』

「夕飯失敗してしまって。せっかくの記念日なのに」

『いいよ。大丈夫だよ。ピザでもデリバリーしよう』

「そうじゃなくて」

『泣いてるの？』

「ごめんなさい」

『もう家に着くから、話そう。息苦しいんでしょう？』

そう言われた瞬間、膝からすとんと崩れ落ちた。ああ、そうだ。息苦しかったんだ。何も触れる事なく日々が過ぎてゆく事が。出かける事に難色を示されたわけでもないのに、何故かそうする事が躊躇われて。勝手に籠の鳥にでもなったような気がして。『君は家に居て僕の帰りを毎日待っていて欲しい』—あの言葉がこんなに自分を見失わせるとは思っていなかった。多分、私も、あなたも。

あなたが帰ってきたら言おう。働いてもいい？外に出ていい？ここでじっとあなたの帰りを待っていないでもいい？きっと、あなたは笑うと思うから。あなたが笑ったら、多分、大丈夫。

文子の場合

「昔から『フミコ』って呼ばれるのが嫌だったんだよね。『アヤコです』って毎回訂正するのが面倒で」ゆず胡椒のさみ串を頬張りながら、文子が不愉快そうに話す。「彼にも間違えられたのよ。仕方ないことなんだろうけど」

文子はいつも唐突に呼び出す。特に、恋人と何かあったときは必ず。学生時代から37歳の今まで、ちっとも変わらない。

文子の恋人は15歳も年下だという。その彼の愚痴は正直もう聞き飽きた。別れたらいいのにと、おそらく50回は言っているだろう。そのくらい、文子と彼は相性が悪い。相性が悪いというよりも、彼は癖がありすぎる。

「また、女の子と二人で会うんだって。友達だって言ってるけど、ネットで知り合って、今度初めて会うんだってさ。それって友達？それとも私がおばさんで、価値観についていけないだけ？」

「それが若者の価値観なら、私もついていけないかもしれない」

今日三杯目の『山ねこ』をあおりながら、文子の恋人を思い描く。細身で長身、目が特徴的だと言っていた。冷たくて、人を見下すような。でも、笑うと右側にだけ笑窪が出来て人懐っこい印象になると言っていた。傲慢で、自己愛が強い。何故か彼に惹かれる女性は多いのだそう。『女のほうから寄ってくるから仕方がない』とは彼の口癖らしい。そんな女性の思いを逆手にとって、上手に貢がせる。

「まあ、クズだよな……」

以前、文子から聞いた事を思い出していたら、そう言ってしまっていた。今まで一度だって、彼女の話を知りたくて批判めいたことは言わないようにしていたのに、だ。最終的に文子と恋人がどうするのか、どうなるのか、私には全く関わりのない事だし、お互いの事はお互いにしか分からないのだから、何かを決定付けるような事は言いたくなかった。ただ聞くだけ。背中を押したりはしたくない。関わりたくはない。だって、人の恋愛なんて面倒くさすぎる。自分の恋愛さえ面倒で、私は遠ざかっているのに。

「うん。私もそう思う」

自虐的に笑いながら、彼女は同意する。

「私の気持ちはすり減っていて、もう駄目だと思うの。それでもなかなか別れられないのは、たぶん私が強情なのよね」
彼女の聡明な横顔は、微笑んでいるのに何も感情がないように見える。それは恋人の愚痴を言っているときの表情とは思えないほどだ。恐らく、彼女は愚痴を言いつつ悟っている。すり減った心と、すり減っていく関係を断ち切る時だ。それでも、なかなか行動に移せないのは、私たちが『もういい歳』だからなのかもしれない。

30代も後半になると、恋愛という事柄に対して気持と行動が一致しなくなってくる。不毛な恋愛に疲れてもうやっていけないと思う。それでも別れられない。それは矢張り恐怖なのだ。自分の年齢を考えたら、例え別れたとしても次に寄り添ってくれる男性など、現れないように思える。寂しいのではなく、恐怖。一生独りでいる覚悟をするには早いけれど、この先確実に誰かとえられる保証もない。

賞味期限がとうの昔に切れてしまった事くらい、私たちは痛いほど分かっているのだ。

「また男の愚痴になっちゃったよ。もういやだなあ。こんなのは」

ひとりごとみたいに、彼女がつぶやいた。私も、ひとり言のようにつぶやく。

「仕方がないよ」

そう言って心が冷たくなった。

仕方がないの。もう私たちは37歳だもの。

もう、屹度、美味しくはないもの。だからしがみついてしまうのよ。

それが最高に恰好悪くても、一人になって人生を謳歌なんて達観できない。

文子だけじゃない、私も愛してくれない人と別れられない。相手がいる人と、別れられない。彼がひとりになるのを、無駄だと思いながら待ち続けている。不毛な、恋愛。

「誰かと、寄り添っていきたいね。結婚しなくてもいいから」

私の気持ちを見透かしたように、文子が言う。

「だから、私やっぱりあいつと別れるよ。うん。別れる。寄り添ってくれない男なんかごめんだし、私も誰かに寄り添ってもらえるような女にならないとさ」

初めから、答えなんて分かっているのだろう。

文子は残りの『山ねこ』を飲みほして、私の背中を軽く、叩いた。

「あなたも、ね。別れようね」